

坂田周一教授のご退職にあたって

三本松 政之

SANBONMATSU, Masayuki

坂田周一教授は、長野大学、東京都老人総合研究所、日本社会事業大学、駒澤大学を経て、1998年にコミュニティ福祉学部の創設メンバーとして赴任され、その後18年間にわたり研究、教育に携わられてきました。学部ではコミュニティ政策学入門、社会政策、福祉制度論を、また大学院では、福祉政策原理をご担当されてきました。教授のご専門は、福祉政策に関わる諸原理、福祉国家・福祉社会論、また貧困・不平等を中心にした福祉政策問題、福祉サービスの組織・運営・行財政・資源配分問題、そしてコミュニティ政策と多岐にわたっていますが、これらの領域へのアプローチにおいて精緻な理論的な考究とともに、東京都老人総合研究所の研究員時代に培われたであろう実証的な研究も進められ、どちらかに偏ることなく双方を研究の両輪とし、多くの業績をあげられてきました。2003年には「社会福祉における資源配分の研究」で東洋大学より博士号(社会福祉学)を授与されています。この学位論文を基に著作化された『社会福祉における資源配分の研究』(立教大学出版会)は、2004年3月に「第5回損保ジャパン記念財団賞」を、また同年10月には「日本社会福祉学会賞」を受賞されており、そのことでも研究水準の高さを知ることができます。

学会活動、社会的活動では、日本社会福祉学会理事、日本学術会議連携会員など多くの役職を務められ、また2006年には本学で開催された日本社会福祉学会の第54回全国大会で大会会長を務められています。現在は社会福祉士国家試験の試験委員会委員長という重責にあります。なお、クリーブランド州立大学、ワシントン大学、ブリティッシュコロンビア大学、オーストラリア国立大学で在外研究も経験されています。

ご在職中の18年の間に坂田教授は学部への多くの貢献をされてきましたが、そのうちの一つに大学院の設置に関わられたことがあります。コミュニティ福祉学研究科の申請作業委員会の責任者としてその企画・申請書類の作成・折衝などにあたり、コミュニティ福祉学研究科の設立に貢献されました。また教授は全学情報企画委員会の委員のときには「ゼミの進化」というタイトルでNTTドコモ社のテレビCMに登場され本学の当時の「モバイルVキャンパス」において携帯電話から学内のイントラネットにアクセスできるシステムの活用を紹介し話題となりました。

場面は、とあるゼミ室。授業は終了時間を迎えようとしている。教師が「なにか質問は」と学生に促しているが、彼らはそわそわしているばかりである。終了とともに、学生たちは思いおもいの方向に飛び出していく。総長らしき人物が、この様子を窓の外から眺めてはため息を

ついている。場面は変わって教授室。先程の教師がPCに向かって画面を眺めながら、なにやら楽しそうな表情や納得したような表情をしている。たちまち教師が画面から消え、PCが青空に舞い上がり、たくさんの携帯電話が現れてPCとコミュニケーションをしている様子がCGで展開する（「携帯電話を授業に生かす—コンピビアルなキャンパスの創造をめざして—」『書斎の窓』2000年11月号、有斐閣より）。



坂田教授は自らこのCM中の教授役としてゼミ生とともに登場されています。

教授は学部設立から4年後の2002年に教授会構成員による最初の選挙での学部長兼研究科委員長に就任されました。在任中には1学部1学科体制であった学部を、福祉学科とコミュニティ政策学科の2学科体制に発展をさせました。なお、この間に詳述は控えますが、あるできごとをめぐりご英断により解決を図られるということがありました。たいへんな心痛をとまうご苦労をされたことも記しておきたいと思います。学部長の任を終えたのちには、総長補佐、副総長を歴任され、とくに副総長時代には新座キャンパスの担当として、キャンパス整備などにも力を発揮され、全学の運営に貢献されてきました。

さらに坂田教授は研究のみならず教育面にも多くの貢献をされています。授業はいうまでもありませんが、社会福祉原論の教科書として執筆され、すでに定番とあってよい『社会福祉政策』（有斐閣）は3版まで版を重ねており、他方で、福祉援助実践に必要な福祉ニーズを把握するための調査手法に関わる『社会福祉リサーチ』（有斐閣）も著されており、これらのテキストは深い学識があってこそその明快な文章で記されています。近年では、私たちのコミュニティ福祉学という独自の学を基礎づけるために学部メンバーと執筆した『新・コミュニティ福祉学入門』（2013年）、また坂田教授が所属している学科であるコミュニティ政策学科のテキストとして学科メンバーと執筆した『コミュニティ政策学入門』（2014年）の、2冊のテキストの監修者として幅広い領域によって構成されるコミュニティ福祉学およびコミュニティ政策学を、体系的に位置づけ、学部および学科の学びの基礎づけに貢献されています。

このような坂田教授も本学の定年を迎えられご退職されますが、できればもう少しお残りいただきご指導を受けたいところです。残念ながら例外は認められません。坂田教授は、ライフワークとしてのご研究への意欲、またヴァルネラビリティなどの今日的なテーマなどへの強い関心を持ち続けられています。本紀要にもその一端を「卒業論文」として記される予定として聞いています。多くの本学へのご貢献に心より感謝するとともに、いっそうのご活躍とご健康をお祈りいたします。